

「第8回 植物病理を紡ぐ会」開催のお知らせ

日本植物病理学会大会の開催にあわせ、若手および中堅研究者有志による自主勉強会「植物病理を紡ぐ会」を開催しております。この勉強会は、学生や若手会員が情報交換や親睦を深める場として、各地の地域部会で活発に開催されてきた「若手の会」を全国大会でも実現しようとする試みです。本会は、①植物病理学が対象とする「現場から実験室まで」「基礎から応用まで」という広範な分野について理解を深めていただくこと、②植物病理学を学ぶことで得られる多様なキャリア選択肢を知っていただくことを目的としています。さらに、参加条件に年齢制限を設けないことで、若手研究者に限らず、分野・業種・世代の垣根を超えた交流と議論の場を提供し、参加者全員が様々な視点から植物病理学を考える機会とすることを目指しています。今回は特別講演として、神戸大学の土佐幸雄教授をお迎えします。講演終了後には、会場周辺にて懇親会も予定しております。幅広い分野にまたがる植物病理学の特色を生かした、多様で活発な議論や交流の場になることを世話人一同期待しております。学生や若手の皆様、本会の趣旨にご賛同いただける皆様、ぜひ奮ってご参加ください。

〈日時〉 令和7年3月28日（金）14：00～17：00

〈会場〉 サンポートホール高松 第1小ホール

〈詳細告知用WEB サイト〉 <https://www.facebook.com/植物病理を紡ぐ会-811362728949422>

〈参加登録フォーム〉 <https://forms.gle/1Rhtpqxmh9n7XtdCA>

〈プログラム（敬称略）〉

14：00 開催

14：10～14：40 佐藤 有希代（ケルン大）

「植物病理とウイルスと宿主の多様な関係」

14：40～15：10 畔柳 康典（岡山県農林水産総合センター農業研究所、岡山県病害虫防除所）

「岡山県職員の植物病理に関わる仕事と私 ～生産現場の問題解決に向けて～」

15：10～15：30 休憩

15：30～16：00 橋本 将典（静岡大学）

「植物ウイルスから根圏微生物叢に至るまでに考えてきたこと」

16：00～16：50 特別講演 土佐 幸雄（神戸大学）

「境界領域 "pathogenetics" を亀が行く」

16：50～17：00 閉会（参加者記念撮影）

18：00～ 懇親会

〈懇親会について〉 お店の予約の都合上、懇親会への参加をご希望の方は、**2025年3月7日（金）**までに参加登録フォームよりご登録をお願いいたします。

〈参加申し込み〉 上記「参加登録フォーム」よりご登録をお願いいたします。事前参加登録は、**2025年3月7日（金）**までにお済ませくださいますようお願い申し上げます。

〈世話人代表〉

安達広明（京都大学）、鮎川侑（愛媛大学）、鶴家綾香（国際農研）、坂田七海（岡山大学）、深田史美（岡山大）、（五十音順）

〈お問い合わせ〉

安達広明 Email : adachi.hiroaki.3s@kyoto-u.ac.jp（“あ”を@に変換してご利用下さい）

TEL : 075-921-0652

【講演要旨】

「植物病理とウイルスと宿主の多様な関係」

佐藤 有希代（ケルン大）



ウイルスは、植物に病気を引き起こす悪い面から、植物病原菌を弱らせる良い面まで、いろいろな面から植物の健康に関わっています。近年、生命情報科学技術の発展に伴い、あらゆる生物から新しいウイルスが指数関数的に見つかってきています。実は身近に潜んでいたのに見過ごされてきたウイルスたちは、一体何をしているのでしょうか。私は植物ウイルスと菌類ウイルスの研究を経て、ウイルスが宿主の進化に及ぼす影響に興味を持つようになりました。ただいまドイツで菌類進化研究の修行中です。いろいろなウイルスと宿主に触れて学んできたことをご紹介できれば幸いです。

「岡山県職員の植物病理に関わる仕事と私 ～生産現場の問題解決に向けて～」

畔柳 康典（岡山県農林水産総合センター農業研究所、岡山県病害虫防除所）



大学の学生実験で顕微鏡を覗き、植物の細胞に病原菌の菌糸や胞子がある様子を見た時に、「こんな小さな世界の中に植物と病原菌の壮大なやりとりが見える」と、感心させられたことが私が植物病理の世界に進むきっかけとなりました。大学卒業後は、せっかく農学部を卒業したのだから農業に関係する仕事がしたいと考え、農業行政を行う県職員の道を選びました。県に入庁して最初に農業普及指導員として産地指導を行いました。その後、農業研究所へ配属、途中、行政経験を経ましたが、現在も農業研究所の病虫研究室に在籍しております。研究室では、発生予察事業を行う防除所の業務を兼務しながら植物病理に関わる研究開発業務を行っています。

今回は、様々な病害に苦しめられる生産現場の問題解決を目的とした植物病理に関わる業務について、県の立場から、私の事例を参考に紹介していきたいと思います。

「植物ウイルスから根圏微生物叢に至るまでに考えてきたこと」

橋本 将典（静岡大学）



私が、学部4年生で植物病理学研究室に配属されてからちょうど20年が経とうとしています。「砂漠の緑化を研究したい。農学部を目指す」と三者面談で宣言した中学3年生は、その後恩師となる先生の講義と実験の面白さに惹かれて植物病理学を志し、植物ウイルスの研究をスタートさせました。これまでの20年の半分強を植物ウイルスの研究で過ごし、いくつかのきっかけがあって現在は根圏微生物叢をメインのテーマに据えて研究を行っています。研究を取り巻く社会の変化を横目ににらみつつ、自分が面白いと思える研究を目指して続けるために考えてきたことや現在の研究テーマについて話題提供したいと思います。

「境界領域“pathogenetics”を亀が行く」

土佐 幸雄（神戸大学大学院農学研究科）



私の卒論のテーマは、オオムギ品種とオオムギうどんこ病菌レースの間に認められるレース・品種間特異性の生化学的解析であった。ところがなかなか思うようなデータが出ない。思い余って、遊びでオオムギうどんこ病菌をコムギに接種してみた。肉眼による表現型は確かに無接種葉と変わらない「免疫性」であった。ところが細胞観察をしてみると、過敏反応が全面に起こっていた。「これはレース・品種間特異性と質的に同じではないか」と気が付いた。これがすべての出発点であった。この仮説を証明するためにはどうしたらよいか考えた結果、「分化型一属間特異性がレースー品種間特異性と同様 Gene-for-gene theory によって支配されていることを証明すればよい」という結論に至った。そこで、植物病理現象（植物属レベルの寄生性分化）にメンデル遺伝学的手法で切り込んだところ、そこには誰も手をつけたことのない世界が広がっていた。以後40年間、メンデル遺伝学の斧のような力強い切れ味にすっかり魅せられ、この植物病理学と遺伝学の境界領域（仮に pathogenetics とする）の研究を行ってきた。その過程で得た、研究を進める上でのいろいろな教訓等を紹介したい。